
ささやかな想い

vicious

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ささやかな想い

【Nコード】

N9517G

【作者名】

V i c c i o u s

【あらすじ】

前作「暖かな想い」のスピノフ作品。物語は大原一也おおはらかずやの視点で別の軌跡を繋いでいく……。一応、この作品からでも読めるようにしますが、前作を読むことをお勧めします。ちなみに前作は2時間程度で終わります。

プロローグ（前書き）

最初は別キャラの視点で始まります。

プロローグ

2人の少女が学校の教室で会話をしている。

そのうちの1人はあたしの友達の千堂里佳^{せんとつりか}である。
で、もう1人は……一之瀬紫苑^{いちのせしおん}。

つまり、あたし自身だった。

「わあ。流石は紫苑さんですねー」

「里佳だつて理系の教科はできるでしょ？」

「数学はできるんですけど、理科ができないんですよ」

「里佳が理科を理解できないって、なんだか面白いねえ」

「うう、ひどいです……」

さつきから見ているこの光景は夢なのか。

あたしと里佳が中学生の頃の制服を着ている。

中1でやった全国統一テストの結果を見て、あたしたちは談笑しているのか。

それにしても懐かしいなあ。

あたしにもこんな時期があつたんだ。

そういえば、あいつが転校してきたのもこの頃だった。

おおはらかずや
大原一也。

大阪から来たわりには、ちょっと微妙な関西弁を話す彼。
そんな彼に興味を持ったきっかけは何だっけ？

……

……

……

…

「大阪から引越してきた、大原一也です。よろしゅう頼みます」

関西弁を話ただけで、何故かクラスの皆はクスクスと笑う。
大原君もキョトンとした顔をしていた。

彼の顔はそこそこ整っていて、女子の中では彼に熱っぽい視線を送る人もいる。

そんなにあの関西人がいいのだろうか。

「彼は大阪から来たので、戸惑うことも多いだろう。皆でサポートしてあげるように。」
それと、大原君の席はその空席だから隣の人に色々教えてもらいなさい」

「はい」

あたしはあまり彼に興味を抱かなかった。
彼の事に限らず、いつもそうなのだ。

転校生とか言われても、あたしは関心を示さない。
あたしが無関心な性格だからじゃない。
いつも期待を裏切られるからだ。

あたしは人よりも優れていることが多い。
昔から何をやって一番だった。

だが、それ故に渴いた気分になることも多々ある。
あたしと肩を並べる存在がいないのだ。
確かに負けるのは悔しいが、ギリギリの勝負をできないと退屈だ。
もっと白熱してみたいという気持ちになる。

だが、里佳だけは例外だ。
彼女とは小さい頃から友達で今も仲が良い。
あたしの唯一の友達である。

まあ、そんなわけでH Rが終わって大原君の周りに輪ができたけど、
そこには参加しなかった。

時間はあっという間に流れて放課後になった。
校門で里佳と別れて1人で家に帰る。

……はずだったのだが、ケータイを忘れたことに気づいて校舎に
引き返した。

「あたしもバカだねえ」

校舎には誰もいなかったので呟いてみる。
たまにこういう気分になるときはないだろうか。
人のいないところで歌いたくなったりとか。

「ああ。俺は全く気にしてないから………」

ふと、あたしの教室から話声が聞こえた。
声と自称からして男子だろう。

でも、あたしのクラスにこんな声の人いただろうか。

そつと教室を覗いてみた。

夕暮れで赤く染まった部屋に男子生徒が1人。
ケータイで誰かと通話しているようだ。

あれは……、大原君？

「兄貴は自分のこと心配しろよ」

一瞬、あれ？と思った。

大原君は大阪から来た関西人じゃなかったか。
だが、あたしたちと同じ口調で電話している。
しかも教卓で挨拶してた時よりちよつと低い声くハスキーな声。

「会社を背負う者が弱音を吐くな」

何故だろう？

ただ、関西弁の人が標準語を話しているだけなのに。
それなのに、なんだか彼のことがとても気になる。

「ああ、じゃあな」

どうやら電話が終わったらしい。

私は大原君の背後にそつと近寄った。

「驚いたなあ。大原君、猫かぶってたんだ？」

少々意地悪にけしかけてみた。

プロローグ（後書き）

スケジュールがきついたので前作より更新スピードを落とします。

出会い（前書き）

なんだかんだできちんと更新してしまう俺。

出会い

『それじゃあ、またね』

「ああ、じゃあな」

ふう、とため息をついて電話を切った。
なんだか猛烈にイライラする。
どうして兄貴はいつもああなのか。

「驚いたなあ。大原君、猫かぶってたんだけ？」

その言葉に勢い良く振り向いた。

「こんにちは、一之瀬紫苑だよん。シオンって呼んでね、転校生君」

一瞬、呼吸をするのを忘れたかもしれない。
今の通話を聞かれたかもしれないということと。
声をかけてきた女が美人だったからだ。

「よ、よろしゅうありがとっございますっ！」

とつさに返事をしたら、意味不明な日本語になってしまった。
顔から火が出てきそうだ。

目の前の女も口に手を当てて笑いだした。

「ぶ、くくくつ……。君、おもしろいねえ」

「む……。まあ、大阪人やでな」

「へえ。じゃあさっきの会話は何だったのかなあ？普通に標準語話してたよね？」

「あ、あれはやな。……………只の練習や！」

「練習？」

「そうや。こっちに来たからには標準語も練習せんとなあ。ははは」

「ふう〜ん。なるほどねえ」

なんだか俺を見る一之瀬さんはジト目だ。

まあでも、初めて会った相手にこれ以上言及してこないだろう。

と、思っていたが彼女の一言でそんな淡い期待は碎けた。

「その割には随分と流暢に話してたね」

どうやらこの女は少々Sっ気を持ち主らしい。
ニヤニヤしながらこちらの反応を見ている。

「こつち来る前にもちよつと練習してたんよ」

なにが可笑しいのかニヤニヤからニヤリとした顔になった。
しかし、一之瀬さんから全く嫌味を感じないとはどういうことか。
その妖艶な笑い方は彼女の雰囲気とマッチしている。

どうやらDNAからして相手を苛めるのが好きなのだろう。
ある意味で天才といえるべきか？

「練習……ねえ。まあ、そういうことにしておこうか」

「しておこうやなくて、実際そうなんやけどな」

「はいはい。ところで、もう部活とか決めた？」

なんだか俺の主張を無視されたようで気に食わなかった。
が、これ以上蒸し返すと墓穴を掘りそうなので仕方なく流すことに
する。

「うーん、料理部やろか。家では料理やってるし、割と好きやしな」

失礼なことに今度は驚いた顔になった。
まあ、俺が料理の話をすると皆以外そんな顔をするので慣れっこだ
が。

それにしても彼女の表情はよく変わる。

「料理部か……………」

そう呟いて一之瀬さんは腕を組んで考え込んでいる。
俺の入る部活で何を彼女がそんなに悩むのか。

すると彼女はひらめいたように顔をあげた。

「ようし、あたしもその部活に入ろう！」

「はあ!？」

一体さっきの思考で何を思い描いていたのだろうか。
彼女の頭の中を覗けるのなら見てみたい。

「別にあたしが料理部に入っても文句ないでしょ？あたしの勝手だしねえ」

「一之瀬さんって料理できるんか？」

「ちがーう。一之瀬じゃなくて紫苑と呼んで。シ・オ・ン！」

「…………紫苑は料理できるんか？」

瞬間、彼女はちょっと驚いた後、またニヤけ顔になった。
なんかすげえ嫌な予感がする。

「おお。いきなり呼び捨てとは大胆だねえ」

「な…………。さん付けにせなあかんだ？」

「ふふふ。別に紫苑だけでいいよ？」

会話の主導権は完全に彼女のものだ。
なんだか手のひらの上で踊らされている気分。

「じゃあ、紫苑と呼ぶわ」

「あら？結局呼び捨てなんだ？」

一体俺に何をさせたいのか。
苛めるならもっと他にいるだろうに。
どうして俺がターゲットになったのだろう。

「じゃあ私はカズつちと呼ぼうか」

「カズつちい！？何やそのケータイのペットみたいな呼び方は？」

「いいじゃん、カズつちで。はい決定」

俺に反論の余地はなかった。

彼女はなんとも傲慢な性格らしい。

「で、紫苑は何で料理部に入ろうと？」

俺が料理部に入るからなんて言ったら今度は逆にからかってやろう。
この女がどんな恥じらいをするのか楽しみである。

「最近になって料理の腕を上げたいと思ったけど、入るタイミングを逃したんだよねえ。だから君と入る」

俺のささやかな願望は、完璧な答えの前に崩れ去った。
なんて話術の巧みな奴だ。

「そうでっか」

紫苑の顔を見ると、またニヤニヤしていた。

おそらくこちらの思考を読まれていたのだろう。
やっかいなことに洞察力が高いらしい。

苦し紛れに話題を変えることにした。

「そういえば、何であんたここに来たんや？」

「あ、すっかり忘れてた」

彼女は後ろの方にある机の中をぐそぐそと手探りしていた。
どうやらあそこが彼女の席らしい。

てか、俺の斜め後ろじゃないか。
こんなに目立つ人なのに何故気付かなかったのか。
なんだかねで緊張してたのかな。

……ふと、あることを感じた。
さっきまでのイライラがすっかりなくなっている。
いつの間にか俺の中にあつた毒気が抜かれていたようだ。

一之瀬さんのおかげか？

「あつた！これこれ、ケータイ忘れちゃったんだよねー」

「ケータイを机に入れるなんてアホやなー」

「かつちーん」

擬音語をわざわざ口にした紫苑。
どうやらキレたらしい。

また変なことを考えなければいいのだが。

「ここって職員室に結構近いんだよねえ」

「うん？」

「あたしが叫んだら先生たちが駆けつけてくるんだよねえ」

「あああああ。頼むでそれだけは勘弁！」

なんてことを考えるのだろうか。

転校初日からそんなことになっては非常にまずい。

変態のレッテルを貼られ、下手をすれば停学、最悪の場合は退学だ。

「ふふ、君の慌てっぷりに免じて許してあげよう」

なんだか疲れがどつと出てきた。
もうヤダこの女。

さっさと話を打ち切って帰りたい。

「あ、そろそろ帰らないと」

俺の願いが叶ったのか、どうやら帰るらしい。
ようやく解放されるのか。

「帰るんか？ほんじゃ、さようなら」

「あれ？君は帰らないの？」

「この後ちよつと寄るところあるでな」

まあ、そんなの嘘だな。

とにかくこの女とさっさと離れたかった。

この後、一緒に帰ろうなんて言われたらまっぴらだ。

「そつか。バイバーイ」

「さいなら」

顔をなんとか笑顔にして手を振った。
紫苑は教室から出て行った。

「……はあ」

疲れた。

唯一の欠点（前書き）

土曜か日曜のどちらかには更新するようがんばります。

唯一の欠点

うつすらと目を開くと見慣れた天井が視界に入る。

眠い目をこすって意識を整える。

普通なら今何時だろう？と気にするとところを今日に限って違っていた。

「懐かしい頃の夢やったな」

大阪から転校してきた日の夢。

そしてその日の放課後に紫苑に会ったことが内容の大半だった。

ときにこんな話を聞いたことはないだろうか。

夢はその人の欲望を表すという説。

「それがホンマやったら、俺は変態か？」

夢の中では、初めてあいつと会って散々弄られたことしかなかった気がする。

もしも、夢の内容＝欲望という方程式が成り立つとしよう。

それならば、紫苑に弄られるのが俺の欲望ということになる。

どう考えても完璧に変態だった。

「んなあわけあるかいっ!!」

大阪で一度は言ってみたいツツコミ。

その掛け声を一喝して勢いよく拳を振りおろした。

ホントは布団が受け止めてくれるはずだったのだが………

バキッ!!!

「~~~~~っ!!」

もの凄い速さでベッドの木の淵に指が当たった。
しかも手を握ってる状態での小指の第2関節に。

どれほど痛いかな容易に想像できるだろう。

これは相当痛い。

思わず涙が出てきた。

ゴマをすっているような感じで患部をさする。

きっと周りから見れば、今の俺は媚びへつらう卑しい人間に見えることだろう。

朝からとんだ災難だった。

もう何もかも紫苑のせいだと決めつけることにする。

明らかに責任転嫁だが、こうでもしないとやり場のない憤りがおさまらそうにない。

「朝から何やってんのやるな……」

泣きたいぐらいだった。

あ、既に泣いてるんだったな。

ちなみにまだ俺はゴマをすっている。
早く痛みは引いていかないだろうか。

家を出発して学校に向かう。

もう10月だというのにまだ暑さが残る。

学校までの道のりはあまりないが、この気温のせいでしょう。
地球温暖化の影響は凄まじいようだ。

どうせ時間もまだ余裕があるので、のっそりと歩いていた。

朝から無駄な体力を消耗したくない。

寝起きのことがあるから尚更だ。

バシンッ！！

いきなり背後から叩かれた衝撃で前のめりになる。
が、足を踏ん張ってコケるのを防いだ。

なんとなく犯人の予想はつく。
というより俺にこんなことをするのはただ1人。

「何やつてくれるねんっ！」

「おはよー。今日も暑いねえ、カズっち」

「人を叩いて何やねんその爽やかな挨拶？」

「なんか朝から怒ってるね。カルシウム不足？」

「いや、お前のせいやがな」

この罪悪感のカケラも見せないこの女は一之瀬紫苑。

彼女を一言で表すなら猫だろう。

表情がころころ変わったり、気まぐれなところがあったり。

出会った時はあれほどウザく感じたが今はよく一緒に行動している。
同じ料理部として話をしていたりするうちに次第に慣れてきた。

彼女は超が付くほどの天才で、大抵のことをそつなくこなす。

天は二物を与えずというが、そんなものは嘘。

才色兼備、文武両道、さらには文理両道を欲しいがままにしている。

だが、人には必ず欠点というものがある。

紫苑は料理部だが肝心の料理が下手なのだ。

初めて彼女の作ったものを食べた時の惨劇は今でも思い出せる。

……

……

……

…

「え！？転校生君が入部するのは分かるけど、一之瀬さんも？」

「うん。ひょっとしてあたしは入部できなかったりする？」

「いえいえ、とんでもない！一之瀬さんなら大歓迎よ」

「ホント！？ありがとう」

何こいつのこの態度？

俺と会った時とはえらい違うやないか。

これが社交辞令の時の彼女のキャラか？

どうやら紫苑は学校では優等生なのらしい。

廊下ですれ違った先生や部の人からの信頼も厚そうだった。

俺の時は散々からかってきたくせに。
この猫かぶり女め。

「じゃあ、ここにある材料で何か作ってみて」

「ほいほーい」

「は、はい」

急に紫苑の声が弱々しくなった。

ちらつと顔を見ると少し口元が不自然に引きつっていた。
一体どうしたのだろうか？

「おい、あんた大丈夫なんか？」

「え？」

「今、様子がおかしいで。口元が引きつってるわ」

「ま、まかせなさい」

微妙に答えになってなかった。

Vサインも出しているがその手はプルプル震えている。

……………まさか、こいつ料理できないのか？

その後、俺はオムライスを作った。

まあ、出来合いの料理にしてはなかなかだ。

紫苑の作った料理を見える。

その皿の上には得体のしれないものがあつた。

尋ねてみると……

「チャ、チャーハン？」

なぜか疑問形で返事をされた。

どうやらこの薄気味悪い固形物はチャーハンらしい。

一体だれがこれ进行处理するのだろうか。

周りにいた部員たちの口も引きつっていた。

そりゃそうだろう。

こんなチャーハン、世界中のどこに行ってもお目にかかれない。

きつと部員たちも紫苑がこんなものを作るとは全く予想していなかっただろう。

一応こいつは優等生で名が通っているらしいしな。

「え、えーと……。じゃあ君たちで試食し合おうか！」

「ええっ!？」

なんて卑怯なっ!!

俺にこの物体を食えといいますが。

改めて紫苑のチャーハンを見ると、何とも言えない不気味さが漂っていた。

作った本人を睨んでやると「えへっ」と可愛らしいリアクションが返ってきた。

俺って保険に入っていただろうか？

もしかしたら胃薬を用意した方がいいかもしれない。

いや、最悪食ったら死ぬかもしれんな。

これこそ本当の最後の晚餐と言えるのではないかと思う。

だけど断るわけにもいかず、しぶしぶスプーンですくって口のところに運ぶ。

見た目こそ最悪だが、特段おかしな臭いはしない。

もしかしたら案外大丈夫なのではないだろうか。

というより、大丈夫だと信じたかった。

もう、どうにでもなれ!

と、男らしく腹を括って一思いに口に入れてみる。

「うえ……………まずう!」

塩だけでなく砂糖もふんだんに使っているらしい。

そこに醤油の味やら油のギトギトした感じやらが加わっている。食えるだけマシだが、いっそ清々しいぐらいの不味い一品だった。

「じゃあ、あたしはオムライスいただきます」

スプーンにすくわれたカケラをパクツと一口。
次第に紫苑の頬が緩んでいく。

「美味しいねえコレ！どうやってたらこんなの作れるの！？」

「どうやってたらあんな不味いもんが作れるんか、こっちが聞きたいわっ！」

「むー、仕方ないじゃん……。いきなり作るとは思わなかったし。それに人間誰しも下手な分野があるのよ！」

「普通、人間誰しも取り柄があるって言わんか？なんかム力つくわ、それ」

「それにしても美味しいなあ」

「ふ、まあ俺にしてみればこんなん普通なんやけどな」

「人間誰しも取り柄があるんだねえ」

「人の神経を逆撫でするのが趣味なんか？」

.....

.....

.....

...

「あかん。思い出ただけで腹が痛くなってきたぞや」

「思い出すって何を？」

「入部した時に食ったお前のチャーハン」

ボコッ！！

紫苑のカバンが顔にクリーンヒットした。
その衝撃で顔は天を仰ぐように上を向く。
首にかかった負担は凄まじい。

「首がもげて取れるかと思ったわっ！アホか！」

「カズっちが変なこと思い出すのが悪いんだよー！」

「あんな不味いもん、忘れられるわけないがな」

「まだ言うか。しつこいねえ」

互いに一步も引かないまま学校に到着した。
もはやこれは恒例のことだ。
おかげで周りからはケンカするほど仲が良いとか言われてイジられる。

正直言つて紫苑を異性として意識してはいない。
むしろ、倒すべき敵といったところか。

事あるごとに紫苑に勝負を挑んでは、ことごとく敗北している。
俺が料理で負けることはあり得ないが、それ以外では全く勝てない。
つまりは目の敵なのだ。

「ま、もうちょっとぐらい美味くなってほしいわ」

「なんか朝から不機嫌だねえ……。さっきのことまだ怒ってるの？」

実は寝起きからお前のせいで不機嫌だったんだけどな。
いちいちそんなことを言うのも面倒なので適当に、はいはいと答え
ておいた。

とりわけ胸が躍ることもないが、地味に楽しい日常。
こんな日がいつまでも続けばいいと思う。

挑発

「a number of と the number of の
区別は大事」

「ふむ」

「a number of は『たくさん』という意味で a
lot of の”lot”を変えただけと覚えるの」

「なるほど」

「the number of は『の数』となるから、そこは
暗記」

「流石やな。その辺の教師より分かりやすいわ」

「あのねえ。カズつちは文系でしょ？英語できなくてどうすんの？」

「まあ、なんとかなるやろ」

学校に着いてから英語の予習をしていた。

俺たちが真面目だからやっているわけではない。

先生が言うには『英語は予習が命！』らしいので、家でやってこい
と言われている。

それをやってこないで紫苑にヘルプを求めている俺は、むしろ不真
面目だった。

それにしても自業自得とはいえ、朝から英語は面倒だ。

ため息をついて視線を適当に移していると教室の入り口に知っている顔が2人いた。

「おはよう一也、紫苑さん」

「おはようございます」

挨拶してきたのは荻野裕樹おぎのゆうきと千堂里佳。

校内のベストカップルと言って差し支えないかもしれない。何せ体育館に大勢いるなかで2人は告白しあっていたのだ。こいつらを知らない生徒はいないだろう。

「相変わらずアツアツだねー。2人とも手なんか握っちゃって」

「正直言つて俺は恥ずかしいんだけどな」

「いいじゃないですか。皆さんもご存じなんですし」

「っていうワケで里佳さんが離してくれない」

なんて贅沢な。

モテない男が今のセリフを聞いたら何と思うだろうか。

まあ、俺もそんなにモテないけど羨ましいとは感じない。

もしかしたら俺は草食系男子というやつかもしれない。

特定の人に目が行くということもないし、女なら誰でもということもない。

どうしてだか、興味が無い。

「裕樹は将来、尻に敷かれる生活やな。ま、頑張れや」

「里佳さんとなら、そういう生活もいいかもな」

その言葉で千堂の顔はトマトみたいに赤くなる。

「もう。裕樹さんったら……」

なんていうか、仲睦まじいのは良いがバカップルっぽくなってきてないか？

「いいねえ。あたしもそんな恋してみたいよ」

「紫苑さんにも近くに関西弁の色男がいるだろ？」

……………おい。

何故そこで俺の名前が出てくる。

仮にそう思ったとしても心のなかにしまっという欲しかった。もうちょっと空気読めるようになるうよ。

裕樹があんな発言したもんだから紫苑がじっとこちらを見ている。

正直紫苑にじっと見られると居心地が悪い。

只でさえ美人だというのに、改めて、しかも黙って凝視されると気が恥ずかしい。

澄んだ瞳、引き締まった唇、艶やかな髪。

普段は何気なく見ているが、改めて見ると彼女がいかに魅力的かが分かる。

だが、絶対に視線をそらさない。

ここで恥ずかしくなって横を向いたらなんだか負けのような気がする。

俺も負けじと紫苑を見つめ返してやる。

沈黙が流れて何秒たった時か、急に目の前の女はため息をついた。

「カズっちはケンカ友達って感じだし、もうちょっと頼りがいのある人がいいね」

あっそ。

「あと、もうちょっと頭が良くないとねえ」

ぬ……。

「それにカズっちと勝負しても白熱しないしなあ」

ぬぬぬぬ……。

「結婚とかしても、あたしが働いてカズっちは子守りしてそう」

ぬぬぬぬぬぬ……。

さつきから黙って聞いていれば好き放題言いやがって。
流石に温厚な俺でもカチンときた。

「俺だってお前の望む彼氏になれるわっ！！」

そう力一杯叫んでやった。

「……」

3人は口を開いたまま固まる。

え？何この空気？

俺、そんな変なこと言ったか？

気づけばクラスの皆も俺をじろじろと俺を見ていた。

「付き合ってもいいよ」

「……え？」

突然、紫苑が言葉を発した。

確かにその口からは『付き合ってもいいよ』と。

「いや、ちょっと待っ……」

「ただし！次の中間テストであたしに勝ったらね」

「は？」

「カズっちが勝ったらあたしは彼女になってあげよう」

「いや、そやから待っ……」

「でも、あたしが勝ったら1つだけ何でも言うこと聞いてもらおうかな」

「いや、全然つりあってないやん。別にお前が彼女ってそんなん…」

…」

「あれえ？勝負から逃げるのかなあ？」

「ぬ……」

「まあ、そりゃそうだよねえ。いつもあたしに負けてるもんねえ」

明らかに挑発だということは分かる。

だけど、ここで引いてはプライドが粉々だ。
はつきり言って俺は負けず嫌いなのだ。

「ええやろ。その勝負、受けたる」

紫苑がニヤリと不敵に笑った。

だが、それでいい。

その溢れる自信を木っ端微塵に砕いてくれてやる。

「中間テストはあと１１日だから頑張つてねー」

そう言つて席を立つて教室から出て行つた。

余裕綽々の発言だった。

こうなつたら絶対に負けるもんか。

「お、おいー也。無理しないほうが良いんじゃないか？」

「そうですよ。負けちゃったらどうするんですか？」

紫苑、絶対にお前を打ち負かしてやる！

「だめだ。こいつ全然聞いてない」

「まあ、そつとしておいてあげましょう」

「触らぬ神にたたり無しだな」

こうして俺は紫苑に打ち勝つために猛勉強を開始した。

勝負

「違う違う。いいか一也、as long as と as far as は訳が同じ」『する限りでは』だが、意味は違うんだ」

「はあ？そんなら、どないして見分けると？」

「as long as は if または while に置き換えられるんだ。だからこの場合は……」

「なるほどなあ」

「流石は裕樹さんですね」

——放課後。

打倒紫苑のために俺は裕樹に文系教科を、千堂に理系教科を教わっていた。

この2人はそれぞれ文系、理系に特化している。個々では紫苑に太刀打ちできないが、2人の力を合わせれば勝てるかもしれない。

そう踏んだ俺は協力を求めてコーチしてもらっている。

まあ、2人合わせて紫苑に勝てるかもと言えど、実際勝負するのは俺。

俺の点数は紫苑より数段落ちるバランス型だ。だから、この埋めれないところを上手くカバーできれば勝機はある。

で、今は裕樹に英語を教えてもらっているのだが。
何故か千堂も一緒にしているという状況。

「ちゅうかね？千堂、お前は頭ええやないか！なんで一緒に……」

「英語の点は微妙なんですよ。私、理系ですから」

「まあ、いいじゃないか一也。里佳さんがいれば俺も頑張って教えられるしな」

「はいはい、そうでつか」

「おお。頑張ってるねえカズっち」

「む……」

「そんなにあたしと付き合いたいのかなー？」

背後からいきなり現れた宿敵。

うつすら笑って挑発的な言葉を投げかけてくる。

まあ、単に俺のことをからかっているだけで悪意は無いみたいだが。

「んなわけあるかいっ！お前に負けたくないで頑張ってるねん」

「あっそ。ま、無理しない程度にねー」

そう言って自分の席に向かっていった。

「……………」

「里佳さん、どうかした？」

「……え？あ、いえ！なんでもないです」

「そう？なんか紫苑さんのほうをボーっと見てたけど」

「何と言いますか、きっと私の思い過ごしですよ。そんなことより次はあたしが一也さんに教える番ですね」

「え？休憩さんの？」

「何言ってるんですか？そんなんじゃ紫苑さんに勝てませんよ？」

おい、裕樹よ。

なんだかお前の将来が心配になってきたぞ。

鬼嫁って感じにはならないと思うが、なかなか厳しい奥さんになるんじゃないのか？

ま、せいぜい頑張ってくれ。

「じゃあ、微分からいきましょうか」

「へいへい……」

「あ、言っておきますけど生物は教えれませんからね」

ああ、そっか。

千堂が履修しているのは物理と化学だけ。
ってことはどうすれば!?

「裕樹も確か生物やったよな?」

「残念ながら、生物は苦手ではないが今回の範囲のDNAに関しては苦手だ」

「自力でやれってことかいな……」

前途多難である。

——中間テスト当日。

この1週間でかなりの勉強をしてきたつもりだ。
勝てるかどうかは別として、今までよりも最高の結果をだせる自信
はある。

「待つてろよ、紫苑。絶対に勝つたるでな！」

朝から気合は十分だ。

いつもの俺とはまるで別人のようだった。
なんだかいけそうな気がするって感じ。

ヒソヒソヒソ……

急に小声が耳に入ってきた。

周囲を見渡すと通行人たちが俺を奇異の目で見ていた。
どうやらさっきの独り言の音量が大きすぎたらしい。
もう少しテンションを下げるべきだった。

朝から変態扱いされて土気が著しく低下した。
なるべく視線を下に落として早足で学校に向かうことにする。

「はあ？紫苑が休みい！？」

「はい。今朝にメールがきて今日は学校休むって」

「あいつ風邪でも引いたんか？」

「頭痛がするらしいですよ」

なんだか肩透かしを食らった気分だった。

「まったく……。勝負をふっかけた本人が休みってどういふことやねん」

「……………」

「ん？どうした千堂」

「いえ……………」

「おはよう一也、里佳さん。2人ともテストどうだ？」

急に裕樹が現れた。

「おはようさん。それがやな……………」

「紫苑さんが頭痛で休みなんですよ」

「は？それじゃあ勝負はどうするんだ？」

「まだ、追試があるやろ」

「追試の難易度は高いぞ。まさか紫苑さん、ハンデくれたんじゃないのか？」

「それはそれでムカつくんやけどな」

結局、紫苑がいないままテストを受けた。
今までで一番手ごたえを感じたはずなのに、気分はずっと微妙なままだった。

しかしその後日、紫苑はきちんと追試を受けた。
あいつが言うには

『うたた寝しててそのまま一晩過ぎちゃったんだよねえ』

ということらしい。

勉強してそのまま布団も被らずに眠って体調を崩したらしい。
最近は気温がよく変わるからな。

そして今、テストがほとんど返ってきたワケなのだが。
現在の得点は紫苑が5点だけ勝っている。

残りは国語だけだ。

あれはその場で答えを探さないといけないので点を取るのが難しい。
逆に言えば、勝てる可能性も無きにしもあらず。

「一之瀬」

「はい」

紫苑が呼ばれてテストを受け取りに行く。
彼女は先生に用紙をもらって点を見ても顔色1つ変えない。
その表情からは点の良し悪しを判断できなかった。

「で、何点やったんや？」

「それは同時に見せ合おうよ」

「中学生か、お前は」

とは言うものの、内心では少しホッとしている。

これで100点なんて見せつけられたらどうしようかと思った。

「大原」

「はい」

先生からテストを受け取る。
さて、いったい何点取れたのだろうか？
そーっと点数をみてみた。

『91点』

微妙な点数だった。

いつもの俺なら泣いて喜ぶ点数だが、今回は事情が違う。
この点で紫苑に勝てるのか？

単純に紫苑が86点未満じゃないと勝てない計算だ。

「ようし。じゃあ行くぞカズっち」

「お、おう」

「せーの、はい！」

そこに書かれていた点数は……

82点だった。

「ありゃ？負けちゃった」

「俺が……勝ったんか？」

「凄いじゃないか一也！おめでとう！」

「……………」

「一也？」

「ふ……ふふっ」

「お、おい？どうした？」

「なっははははは！」

腹の底から何かがこみ上げてきて、声になる。
もう、止まらなかった。

「あー。壊れちゃったねえ」

「よっぽど嬉しかったんですね」

「にしてもすごい高笑いだな」

「紫苑さんは悔しくないんですか？」

「ま、ちよつとね」

そんな会話も俺の耳には入ってこない。
周りの目を気にせず俺は笑っていた。

バシンッ!!

「あだっ！何なんや人が喜びに浸ってるっちゅうのに」

「あんたは笑いすぎなのよ！ちよっとム力ついてきた」

「ふっふっふ。まあ、勝利に免じて許したるわ」

「あっそ。ところで約束覚えてる？」

「約束？なんやつけ？」

「あんたが勝ったらあたしが彼女になるって話」

「はあ？あれ本気やったんか？」

「本気じゃないんだけど、自分で言ったからには果たさないと気が済まないのよねえ」

「いや、しかしやな……」

「別に深く考えなくてもいいよ？ほんの3日ぐらいだけで終わるつもりだからねー」

紫苑と付き合う……か。

別に紫苑は嫌いじゃないが、そういう関係になるのは躊躇ためらいがある……。

しかし、彼女が欲しいと思ってないワケでもない。

カップルを傍から見ていて羨ましいと思うときもある。

紫苑も深く考えなくてもいいと言っている。

俺はその甘い誘惑に乗ることにした。

「わかった」

「ふうん。結局誘いに応じるんだ？」

お得意のSっ気あふれる物言いだった。

「男なら約束は守らんな」

「ふふ。じゃあ、よろしくね」

こうして微妙な関係が成立した。

hidden...

少し曇った空の下。

ここ数日の暑さと打って変わって頬をかすめ吹く風は涼しい。
ようやく秋の訪れを感じながら、俺はあいつを待っていた。

時刻は10時29分。

そろそろやってくるだろう。

「やあ、カズっち。待った？」

「……今来たところ」

「おう。いいねえそのセリフ。なんか恋人っぽいよ」

何が恋人っぽいだ。

自分からそうしろと言ってきたくせに。

そもそも俺たちが待ち合わせしたのはこういうワケなのだ。

……

……

……

…

『もしもし、カズっち。明日デートしようか?』

「変なもんでも食ったんか?」

『失礼ねー。せっかく少しの間だけ恋人になるんだから、物は試し
つてやつよ』

「そうでつか……。で、何するん?」

『何だかんだ言ってノリノリだねえ』

「（……メ）」

『あれ? そんな怒った顔しないでよ』

何でわかったのだろうか?

もしや部屋に隠しカメラでも仕掛けられているのか!??
気になるから念のため後で探しよう。

『じゃあ明日駅前に10時30分に集合』

「え? おい……」

『一応デートなんだから恋人っぽくねー』

「いや、だから……」

『じゃあねー』

プツン…… ツー ツー ツー

あいつめ、一方的に切りやがった。

……

……

……

…

というワケだった。
せつかく試験明けの休みだったのに何故こんな目に。

「今日は冬服を買うから、頑張つてね」

「はあ？まだ秋なんやけど？」

「甘いねえカズっち。女の子の服はそのシーズンの前に店に並ぶの」

「女って面倒やな」

「そうなんだよねえ。お洒落に気を使うワケよ。ところで、いつになつたらこの格好を褒めてもらえるのかなあ？」

モデルの人みたいにクルツと体を翻して見せつけてきた。
制服でも充分なのに、私服が更に紫苑の魅力を引き立てる。
なんだか恥ずかしくなって、そっぽ向いたまま答えた。

「ま、まあまあちゃんか？」

「ほほう、そっかそっか」

ご満悦の様子だった。
どうやら彼女には内心がバレバレらしい。

「うん。これもいいなあ。しかし、こっちも捨てがたい！」

「両方買えばええやん」

「そんなことしたらお金なくなっちゃうでしょ」

「じゃあ、はよ1つに絞れ」

「それができないから困ってるんだよねえ。カズっちはどっちがい？」

「俺に訊いても意味あらへんやろ」

その言葉に顔がニヤツとなった。

俺、何か変なこと言ったか？

すると紫苑は急接近してきた。

甘い匂いが鼻をくすぐったかと思うと、顔を耳に近付けて

「そんなことないよ？全てカズっちの為に選んでいるんだから」

そんなセリフを囁いた。

言葉と香りが頭を揺らしてくる。

「だあゝっ！！さっさと服選ばんかいっ！！」

「あっははははー！やっぱ面白いよ、カズっち。くっくっく……………」

「ぐぬぬぬ……………」

少しドキッとさせられたのが悔しい。

「ごめんごめん。後でカフェ行くから何か奢ってあげよう。だから落ち着きなさい」

「なんか偉そうな言い方だな」

「あれ？奢ってほしくないの？」

「しゃーないな。許したるわ」

「なんか偉そうだねえ。まあ、とにかくどっちの服が決めよつか。どっちが良い？」

「結局俺に訊くんかい」

「いいじゃない別に。それにホラ、こうしたほうが恋人っぽいじゃない？」

「はあ……。またそれが」

「ふうん。やっぱり奢るの止めにしよかな」

「そうやなあ。俺的には右手に持ってるやつのがええかな」

「カズっちって結構現金だよねえ」

「人の厚意には甘えやんとな」

「はいはい。とにかくこっちがいいんだね？じゃあこれを買おう」

「え？そんなに簡単に決めんの？」

「あたしが2つに絞って、しかもカズっちがとどめに決めた服だよ？OKに決まってるじゃん」

俺が選んだほうを買うのか。

なんというか、ホントはこっいつ何気ないところを恋人っぽいと思うんだよな。

それなのにあいつときたら……。

まあ、楽しそうだからいいんだけどさ。

「いやあ、久々に良い買い物したねえ」

「俺はクタクタ。どっからそんなエネルギーが出てくるんか分かんわ」

「買い物は女の子の活力なんだよ？もうちょっと勉強なさい」

「中間テストで俺に負けたのは誰やったかいな」

「む……」

「あんな大口叩いっとたのになあ」

パコンッ！

「いった！パコンって鳴ったがな」

「このトンチンカンめ！」

「はあ？」

「もういいや、この話は終わり」

まったく変な奴だ。

それにしても少し寒いな。

この前までは暑かったのに、地球はどうなっているのだろうか。

「どうしたのかズッチ？寒い？」

「ん？別に大したことあらへんよ」

「ふうん……。えいつ！」

「な……」

こともあるつか急に腕に抱きついてきた紫苑。
そんな密着したら……。

こいつは自分のスタイルの良さを分かっているのか？

「へっくし！」

「あ、くしゃみした。やっぱ寒いんでしょ？」

「まあ、少し」

「こうしてると暖かいねえ」

そう言って顔を腕にスリスリしてきた。
その仕草はまるで猫みたいだ。

なんだろう？すこしドキドキしてきたぞ。

「なあ、歩きにくいんやけど」

「こんな美少女に抱かれて何を贅沢なことおっしゃいますか」

「自分で美少女とおっしゃいますか」

まあ、美少女なんだけどな。

「別にいいじゃん。このほうが恋人っぽいでしょ？」

また………それか。

さっきまでドキドキしていた心が一気に冷めていくような気がする。

「なあ。もう止めにせえへんか？そういうの」

「うん？」

「事あるたびに『恋人っぽい』とか」

「あれえ？そんなに恥ずかしかったのかなあ？」

全然わかっていなかった。

ここまで言っても通じないなら仕方ないな。

ちよつと力をいれて紫苑の腕を振りほどいた。

彼女は、どうしたの？って目で俺を見る。

「そういう『恋人っぽい』って全然お前らしくねえな」

「え？」

「嫌なんだよ。こんな中身のない空っぽな感じが」

「カズっち？」

「今のお前と居ても全然楽しくない」

「……………」

「今日で別れよう。3日として続かねえよ。じゃあな」

「あ…………」

踵を返して俺はさっさと紫苑から離れた。

どうやらあいつも追ってはこないようだ。
俺の後ろには人っ子一人いない。

まあ、駅から離れて住宅街だし、もう夜だしな。

「ふう。恋人っぽく…………か。何だよそれ」

あいつが何を考えているのか分からない。
あいつの本心分からない。

ふと足を止めて見上げた空は雲で覆われて星ひとつ見えなかった。

「教えてくれよ、紫苑。あの雲の向こうで星はどんな風に輝いている?。」

h i d d e n . . . (後書き)

テストが迫っているので更新が著しく遅れるかもしれない模様。

心は曇り空

「はあ。どうしたものか……」

紫苑にあんなこと言ったものの、後悔している俺だった。

昨日のことあつてか、紫苑は頭痛で休みということになっている。俺にとっては見え透いた嘘だが、皆は知らない。

それにしても、この虚無感は何だろうか。

罪悪感とはまた別のような。

その2つが合わさったせいで、テストの解説が耳に入ってこない。

そのまま時間は過ぎていき、裕樹と千堂と昼飯を食っているワケなんだが。

「なんかボーっとしてるよな一也」

「やっぱそうなんか？」

「ああ。それよりさ、ホントにお見舞いに行かなくていいのか？」

「俺はええよ」

「と言っても一応は紫苑さんの彼氏なんだろ？」

「いやあ、どうしても外せへん用事があるでな」

「そっか。じゃあ里佳さん、2人で行こうか」

「あ、はい……」

「ん？どうかした？」

「いえ、別に……」

それにしても一体どうすればいいのだろうか？
学校を休むなんて一時凌ぎの手段でしかない。
やっぱり謝った方がいいのかな。

「ごちそうさん」

「あれ？もう食ったのか？」

「ああ、ちよつと野暮用があるで先に失礼するわ」

――屋上

俺は授業をサボって空を見上げていた。

何もない空に思い浮かべるのは只1つ。

あいつはどうしているのだろうか？

それだけが雲だった。

「あら。こんなところでどうしたの？サボリ？」

ゆっくり視線を移すと白衣の女の先生がいた。

誰だっけ？

どこかで見たことあるはずなんだが。

「私のこと忘れちゃったかな？桜丘^{さくらおか} 絵梨^{えり}よ」

「ああ。保健の担当の」

「保健じゃなくて保健室の担当よ。間違えないでね」

苦笑いする先生。

その保健室の担当がこんなところにいていいのだろうか？

「あなた、何を悩んでいるの？」

「はあ？」

「前にも会ったことあるけど、そんな顔してなかったわよ」

なんなんだこの人？

会っただけで顔を覚えられとかあり得ないだろ。

「先生の目は誤魔化せないわ。話したらスッキリするかもしれないから、良かったら話してみなさい」

何でだろう。

この人になら話してみてもいい気がした。

「……………実は」

俺は事情をかいつまんで話した。
もちろん紫苑とのことを。

「そっか。あの一之瀬さんとね」

「あいつのことも知ってるんですか？」

「あら。あなたたちは2人とも有名なのよ？」

「え？なんですかそれ？」

「一之瀬さんって美人で賢い優等生だけど、あんまり交友関係ないでしょ？」

「はい」

「でも、あなたと荻野君は別。特にあなたは彼女と親しいから皆が噂してるの」

「そうでつか……じゃなくて、そうですか」

「なんか変に関西弁を使ってるわね。あなた、関西弁より標準語の方が自然よ。本当はこっちのほうの出身じゃないの？」

「どうしてこんなにも鋭いのだろうか。」

「ええ、そうですよ。それより話戻していいですか？」

「そうね。じゃあ質問、一之瀬さんのことどう思ってるの？」

いきなり核心をついてきた。

「どつって……」

何故だろう。

答えに詰まってしまふ。

「答えられないんだ？少しは意識してるのね」

「そりゃまあ、あんなことがあったもんですから」

「あなたは結局どうしたいの？」

「……………」

「まずは自分と向き合いなさい。それからでも遅くはないわ」

「はい」

「それにしてもいいわね」

「はい？」

「青春って感じがするわ」

「先生もまだ若いでしょうに」

「ありがと。また何かあったら保健室に来なさいな。じゃあね」

ボタンと屋上のドアから先生が出て行った。

そういえば、結局あの人はここに何をしに来たんだ？

まったく謎な人である。

「はあ……………」

空を眺めて、言われたことを思い出す。

自分と向き合えてどうすればいいんだろう？

とりあえず自問自答でもしてみるか。

よいい、スタート！

Q「俺の名前は？」

A「大原一也」

Q「趣味は？」

A「料理」

Q「一度してみたいことは？」

A「世界征服、いや宇宙制服やるか？」

Q「好きなゲームは？」

A「ポケットに入れるモンスターの金銀かな？」

金銀までしかやったことないけどね。

最初にワニとか火ネズミをよく連れてたっけ。

Q「好きなアニメは？」

A「龍の球を集めたり敵と戦ったりするやつ。個人的にZよりGTが好きやね」

こんなことしてて意味あるのだろうか？

自分に向き合ってはいるが、なんかズレている気がする。

Q「あなたの気になっている人は誰ですか？」

A「やっぱりあいつやろか？でもなあ……うーん」

あれ？勝手に質問が出てきたぞ？

「こんにちは、一也さん」

「せ、せせせせ千堂！？いつからっ！？」

急に背後から現れた千堂。
心臓に悪い。

「『好きなゲームは？』のところですよ。私もよくやりましたよ、あのゲーム」

「そうか……」

「ええ。博士にはいつも葉っぱが頭についているのを貰ってましたが」

「ええええええ！？」

「まあ、この話はまた後ほど」

「そ、そやな。それより授業はどうしたん？」

「一也さんこそ、どうしたんですか？」

「……………」

「……………」

「ま、無粋なことは訊かんとこか」

「ですよね」

「で、さっきの質問はなんや？」

「そのままの意味ですよ」

「なんでやるな。答えがはつきり出てこんよ」

「紫苑さんはもう答えを出していると思いますよ」

「はあ？」

「きっとテストの時も今日も、頭痛の原因は一也さんですよ」

今日のは間違いなく俺のせいだが……。
テストの時も？

「じゃあ、私は戻りますね」

「え？」

「後は自分で考えてください」

「このまま一緒にサボらへんの？」

「裕樹さんに変に思われたら嫌ですし」

「そうでっか」

「では、頑張ってサボってくださいね」

「斬新なサボり方だな」

ギギィ〜ボタン！とドアが閉まった。

俺は再び青い空を見上げる。

「テストのときも俺が原因か……………」

まさか、あいつワザと休んだのか？
俺に勝ってもらうために。

まあ、これもある意味ハンデと言えばハンデだが、意図が違う。

「……………あれ？」

それはつまり。

俺が勝ったら恋人になるっていうのは。
紫苑は最初からそれが目的で？

「ははは。そんなアホな……………」

どんな推論だ。

あいつが俺を好きだなんて。

あいつが俺を……………。

『カズっち。明日デートしようか？』

『そんなことないよ？全てカズつちの為に選んでいるんだから』

『このほうが恋人っぽいでしょ？』

.....。

なんだこの息苦しい感じは？

本当の俺

ベッドに寝そべって天井をぼんやり眺めていた。そうしてからのくらの時間が経ったのだろう。頭の中は同じことがグルグル回っているだけ。

「紫苑……」

さつきから何回も呟いているその言葉。この響きが俺を更なる深みへと突き落とす。

「あかん。ちょっと夜風に当たろかな」

上着を羽織って出かける準備をする。コンビニでなんか菓子でも買おうかな。ポテチでも食べたい気分だ。

玄関まで行って靴を履く。

すると、ドアがおもむろに開いた。

「ただいま」

「おかえり。今日は早いな兄貴」

この人は俺の兄貴で秀一ひこいちという。
なんと会社を経営している。

といっても親父の会社を1つ任されたただだが。

実は俺の家は金持ちで、親父は3つもの会社の社長をしているのだ。
本当は4つだったが、兄貴が1つだけ請け負うことになった。

兄貴はとても優秀で期待されている。

その反面俺のことは目もくれない。

だが、俺は別にこれでいい。

過度の期待を背負うのは苦手。

だからこの状況にむしろ感謝しているぐらいだ。

「今から出かけるのかい？もう10時だよ？」

「ちょっとコンビニ行ってくるだけやから」

「そうか。気をつけてね」

「へいへい」

兄貴は話し方が弟である俺に対しても偉そうではない。
もともと気が弱いのだ。

すぐ弱音を吐くのが兄貴の癖なんだよな。

「うわっ。さぶっ」

ドアを開けると予想以上に肌寒かった。
ま、これぐらいなら平気か。

「ありがとうございますあ」

店員の営業スマイルに見送られながらコンビニを出る。
学生は10時までしか外出できない。
さっさと帰ろう。

ふと、わき道から声が聞こえてきた。

「へっへっへ。ちょっとぐらい良いだろ？」

「そうそう。ちょっと付き合ってくればいいんだからさあ」

そんな声が聞こえてきた。

アホな連中はどこにでもいるもんだな。
下手に関わりたくないし、気にしないでおこつ。

「ちょっと！何すんのよ！」

ん？この声まさか……。

改めて連中のほうを凝視した。
男が3人とその向こうにいるのは……。
紫苑がいた。

「あ、あいつ！」

気づいたら俺は走っていた。
あれこれ考える暇なんてない。
俺が助けないと！

3人組みの連中の間をすり抜けて双方の間に立つ。
不意の登場に驚いたのか、相手の目がかなり開いていた。

「な！？何だお前はっ！？」

「か、カズっち！？」

さて、割り込んだはいいとして、どう切り抜けようか。
最低でも紫苑だけは守らないとな。
後ろのほうは行き止まりだし。

やっぱ、喧嘩しかないのか。

「こいつ俺の友達なんで止めてくれんか？」

「はあ？お前には関係ねえーだろ」

「そうだそうだ。早く帰って寝てろ、ガキ」

ん？なんかこいつら見たことあるぞ。

「そうか。ボウリングの時の奴らやな。1人余分やけど」

「……あんときのガキか」

「こんどは容赦しないぞ、ガキ」

1対3で守り抜くのか。

ただ戦うだけなら大丈夫だが、紫苑を庇いながらってのはキツイ。
どのみち不利でも、背に腹は代えられないがな。

「紫苑。少し離れてろ」

「う、うん」

「おーおー、ヒーロー気取りだねえ、ガキのくせに」

「じゃあそのヒーロー君にはぶっ倒れてもらおうか」

「なんや？ 3人がかりじゃないと俺と戦えんのか？ 情けない奴らやな」

ちよつとドスの効いた声で挑発してみる。

「あんだとゴラァッ！！」

大振りの右ストレートがくる。
素人のパンチだ。
これくらいなら余裕だな。

さつと避けて腹に叩きこむ。

ドスッ！！

「がはあっ！」

まずは一匹めだ。
少しずつ相手の戦力を削るしかない。

「ちい……こいつ……。今度は2人がかりで行くぞ！」

「おう！」

2人が同時にパンチを繰り出してきた。
俺はとっさにそれをガードする。
が、対処しきれない。

「ぐはっ！」

「そらそらどうしたヒーロー君？」

1つは防いだが、もう1つを顔に食らった。
唇が切れたかもしれない。

「くそつたれ」

「はっ！まだまだいくぜ！」

ボディにさらに一発食らってしまった。

まずいな。このままじゃ……。

「安心しな、ガキ。お前をぶちのめしたら、俺たちがその女と遊びまくってやるからよ」

プチンッ

俺の中で何かがキレた。

どす黒い怒りがこみ上げてくる。

俺は鋭い視線で睨み付けた。

「貴様ら。こいつに手を出すんじゃないやねえっ！……！」

狙う相手は1人だけ。

標的に渾身の一撃を放つ。

俺の拳は敵の腕をえぐっていく。

「ひいひいっ！……！」

おそらく骨が折れたのだろう。

相手の腕はあり得ない方向に曲がっている。

それを見て連中は真っ青になり、情けない声をあげて逃げて行った。

ふう、なんとか収まったか。

「カズっち!!」

奴らが去っていくのを見て、紫苑が駆けつけてくる。
俺も紫苑の方へ歩こうとするが……

「あれ？」

足元がふらついた。

さっきのダメージが足にきたようだ。
思わず崩れそうになる。

「つとと。だ、大丈夫カズっち？」

突然甘い匂いが俺を包み込む。

紫苑が受け止めてくれた。

ちょうど俺が紫苑を見上げる形になっている。

「どうしてさつさと倒さなかったのよ!? あんたなら……」

「アホ。相手を倒すことだけが勝ちやない。本当の勝利はお前を守り抜くこと」

「何で……何であたしなんかを………」

紫苑の目から涙が溢れてきた。

こぼれた雫が俺の頬に落ちて伝っていく。

「……ごめんね。あたし………」

「何でそこで謝るねん？ありがとっくらい言えへんのか？」

その言葉に紫苑はハツとした顔になった。

彼女は涙を拭き、改めて俺に向かう。

「ありがとう、カズっち」

綺麗な笑顔だった。

それはもう、見惚れてしまっぐらいに。

「お、おう。どういたしまして……っう」

「どうしたの！？……あ、唇から血が出てるじゃない！」

「さっき殴られた時に切ったみたいやな」

「じつとしてね」

そう言つて紫苑は顔を近づける。

え？おい？

これって、このままだと……

「……んうつ」

口と口が優しく触れ合った。

柔らかい。

紫苑の唇ってこんなに柔らかいのか。

「……ちゅ。れろれろ……」

「~~~~~っ!？」

突如、ぞわぞわとした感覚に陥る。

これはまさか、紫苑の舌が俺の唇を這いずっているのか？

さっきので負傷した口を舐めているらしい。

やっぱりこいつは猫みたいなやつだ。

それにしても、気持ちいいなこれ。

だが、それ以上に恥ずかしかった。
俺は名残惜しいけれど、紫苑から逃れようとする。
少し抵抗すると顔が離れた。

「あ、こら！動いちゃダメ！大人しく舐められなさい！」

どんな命令だよ、それは。

有言実行とばかりに、紫苑は俺の顔を掴んでもう一度キスをする。

このままじゃ、またあの舌の感覚が……。
あれは色んな意味でやばい。

こうなったら俺も負けてられない。
そつと紫苑の顔を掴んで更に引き寄せる。
これなら舌も使えまい。

「んんん！」

どうしたんだろう。

なんだか体が熱くなってきた。

紫苑の匂いが、感触が、温もりが、俺を沸騰させる。
痛みさえも忘れていく。

気付けば俺はただ紫苑を求めている。

「…………ふんう…………ぷはっ」

息苦しくなってきた。離れた。

唇には熱い余韻と感触が残っている。

「…………バカ」

照れた顔でそんなことを言う紫苑。

俺はようやくこいつが好きなんだとはつきり分かった。

あいつらの言葉にキレた時にも思ったんだ。

紫苑には俺だけが触れていいんだと。

だから……

本当の俺のままでこの想いを……

「遅れてごめんな」

「え？」

「俺、お前のことが好きだ」

「あ……………」

「ずっと側にいたい」

「……ずるいよ。急にそんな声で、そんな口調で言うなんて……」

「本気だからな」

「うん。私も好きだよ、カズっち」

こいつだけは、ずっと守ろうと思った。
何があっても紫苑だけは……。

ちょっと寄ってごうか

「それにしてもさ、カズっちの家って豪邸だよね」

「ただゴツイだけやわ、こんなもん」

「それを豪邸って言うの。いいなあ豊かな生活」

「金持っているだけが豊かなワケちゃうぞ」

「あたしもこんな家に住みたいよ」

「ちゃんと話聞いてたんか？」

「うん、お金持ちなんだよねー」

「はあ……」

現在コンビニからの帰り。

俺の家はちょうど紫苑の家とコンビニの中間地点なのだ。
で、紫苑がついでに俺の家に寄りたいと言いだした……。

「しかしなあ……。兄貴がおるし、やっぱ止めにせえへん？」

「えー！？何でなのよ？晴れて恋人同士になったから問題ないじゃない」

「それはその……。ああもつ、分かった勝手にせえ！」

「照れ屋さんなんだから」

すつと伸ばしてきた人さし指で鼻をツンとされた。

瞬間、腰から背中にかけて少し震えあがった。

何だこのゾクツとする妙な感覚は？

「いいねえ、その反応」

「やっぱお前はSやな」

「じゃあ、カズっちはM？」

「俺は普通や。お前が異常なだけ」

「なんかカズっちを見てると嗜虐心が湧いてくる時があるのよねえ」

「なんやそれ？俺そんな体質なんか？」

「きっと好きな人は苛めたくなるものなのだよ」

嬉しいような悲しいような。

「ただいま」

「ああ、おかえ……り？」

兄貴の視線が俺の後ろの紫苑に定まった。
まあ、そりゃそうだな。

「夜分遅くにお邪魔します」

紫苑のスキル、礼儀正しい優等生マスク発動。

「一也、その子は？」

「お、おおう。こいつはやな……。そう！俺のクラスメ……」

「一也君の恋人の一之瀬紫苑です。どうぞお見知りおきを」

はあ……。もうどうにでもなってくれ……。

「こちらこそよろしくね。ところで」也

「ん？」

「その顔の傷はどうしたの？」

「ちょっと騒動に巻き込まれてな」

「騒動……ね」

兄貴は俺と紫苑を交互に見る。

まあ、なんとなく感づいているだろうな。

「あの……。お兄さんのお名前は？」

「そついえば名乗ってなかったね。秀一です」

「なあ、早く傷の手当てしたいんやけど」

「ああ、ごめんごめん。じゃあ、部屋に戻るから」

そつ言つて2階の自室へと向かつていく。
が、途中で振り向いた。

「きちんと高校生らしい付き合いにしときなよ？」

「じゃかましいわドアホ！」

「はっはっは」

今度こそ2階へと登っていった。

「さて、カズっちの部屋はどこなの？」

「救急箱は居間ん中やわ」

「なんだつまんないなあ。まあさっさと手当てしよっか」

「じゃあね。カズっち」

「ホントに送ってかんでええんか？」

「いいよ。その代わり……」

ニヤリと笑って紫苑は顔を近づけてきた。

ちゅっ

「バイバイのキスって一度やってみたかったのよねえ」

「~~~~~」

「ふふ。またね、カズっち」

俺は口に手を当ててそっぽ向くしかできなかった。

次第に紫苑の姿が見えなくなっていく。

一応、後でメールしとくかな。

家の中に戻ると兄貴が立っていた。

「なんか用？」

「一也、わかっているのかい？」

「何が？」

「……いや、何でもない」

「そうか。なら俺は部屋に戻るわ」

「ああ」

2階にある自分の部屋を開けると少し暑かった。
クーラーをつけると俺はベッドに寝っ転がる。

「あ、そっぴゃポテチどっかに置き忘れたな」

まあ、あんなことあったしな。

ポテチ片手に抱きしめあうとかムードも台無しだな。

『一也、わかっているのかい?』

ふと、兄貴の言葉が脳裏をよぎった。

「そんなこと、いちいち言わなくても分かっているさ」

ちょっと寄ってごうか（後書き）

久々の更新。最近忙しくて忙しくて暇を見つけては更新します。

帰ってきた親父

――昼休み

俺たちは屋上で昼飯をとっていた。

俺と紫苑が恋人同士になったことを話すと千堂と裕樹が……

『じゃあ、明日はそれぞれ恋人同士で弁当を食べましょう』

『ダブルデートみたいな感じでいいんじゃない？』

『そうですね』

ってことになった。

至極、意味不明な企画である。

で、まあカップルで弁当を食べているわけだ。
隣を見ると……

「うん、流石里佳さん。料理も上手いなあ」

「どんどん食べてくださいね」

まあ、普通のカップルの光景だ。

誰もが一度はこういうことをやってみたいだろう。

それに引きかえこっちは……

「うん、流石カズっち。相変わらず料理の腕は凄いなあ」

「何でお前が作ってもらっ側なんやろな」

「だってあたしが作ると不味くなるから」

「まあ、お前にそんな期待するほうが間違ってるんやけどな」

「人には得手不得手があると思っわけよ」

「さようか……」

俺も弁当に箸を伸ばしておかずを取ろうとした。

が、そのおかずは横から出現した別の箸にさらわれてしまった。その腕をたどっていくと……

「うーん、私のより美味しいですねえ」

意外なことに千堂だった。

いや、そうでもないか。こいつは結構お茶目なところがあったりする。

「頑張れば料理人になれるんじゃないですか？」

「料理人……か」

「そうだよカズっち。目指せ中華一番！」

「それは某アニメやろ。えらい簡単に言うてくれるけど、簡単になれるもんちゃうがな」

「ネガティブ思考だねえカズっち。駄目だよそんなんじゃない」

「じゃあお前は？将来の夢とかあるんか？」

話を紫苑に振ってとりあえず茶を飲む。

「あたしはカズっちのお嫁さんだね」

ブブー！

勢い良く噴射した茶は裕樹の顔にかかってしまった。

「おいー也。せめて誰もいないところかって吐けよな（……メ）」

「……ほっ、けほっ……す、すまんっ」

「今の反応はちょっと傷ついたよ」

「けほっ……、はあ。こんのボケえ！飲んでた茶が鼻に入ったわ！」

「一也さんは見事な照れ屋ですね。紫苑さん、頑張ってください」

「言われなくても、カズっちをリードできるのはあたしだけよ」

「他人に茶をかけないようにたしなめてやってくれ、紫苑さん」

「カズっち。他人に茶をかけてはいけません」

「お前のせいじゃ！」

皆で笑い合った。

なんだかんだで俺も楽しんでいた。

これからもこんな日々が続けばいい。

そんなことばかり考えていた。

日常が崩れ去ることも知らずに。

「ただいま」

靴を脱ぐうとして足元を見ると見慣れない靴があった。
この靴は親父のだ。

「帰ってきてたのか……」

おそらく居間にいるのだろう。
どのみち顔を合わせることにはなるだろうし、挨拶ぐらいはしとくか。
そう思つて居間のドアを開けた。

「帰ってきてたんやな。おかえり」

「ああ、一也か。ちょうどいい。話があるからそこに座りなさい」

親父に言われてその辺のソファに腰掛ける。
兄貴に話なら分かるが、何故俺なんだ？

「早速だが、話と言うのはお前が彼女を連れてきたと秀一から聞いてな」

「兄貴が？」

「お前、一体どういっつもりだ？」

「どういっつもりって別に深い意味はあらへんよ」

「そのふざけた関西弁は止めなさい。死んだ男のことをいつまでも引きずりよって」

その言葉に怒りが込み上げてきたが、自制する。

「別に深い意味は無い。俺はその女が好きになった。ただそれだけだ」

「お前には許嫁がいるだろう！」

「ああ。どこぞの社長の娘か。あんな女に興味はない」

そう、俺には許嫁がいる。

いわゆる政略結婚という時代遅れも甚だしいものだ。
相手とも以前に会ったことがあるが、どうにも好きになれない。

「どうせお前は1人では生きていけん。ここで結婚しておくのが身の為だ」

「調子に乗るのも大概にしろよ？俺の人生は俺が決める」

「調子に乗っているのはお前だ！育ててやった恩も忘れるとは何と

薄情な奴だお前は！」

「恩も何も、育ててもらった覚えなんてねえよ。お世話になったのは家政婦さんぐらいだ」

「それでも経済的に工面してやったのは私だろう!？」

「有り余る金がありながら何が工面してやっただ」

「いい加減にしないで！親に向かって何だその口のききかたは！」

「悪いが親と思ったことは一度もないんでな」

「もういい！この家から出ていけ!!」

「そうか、じゃあ荷物まとめて出ていくわ」

そう言い残して部屋を出た。

緊急措置

「ふうん。それで家を飛びだしてきたってワケね」

「ああ」

当てもない俺は紫苑のところに行った。

一人暮らしをしているのでなんとか泊めてもらえるよう説得中。

「まあ、部屋は余っているけどさ。近々お姉ちゃんが遊びにくるのよねえ」

「ってことは無理？」

「いや、問題はそこじゃなくて……。ほら、言ってみればこれって同棲になるじゃない？」

「なっ」

そうか。何も考えずに来てしまったが、これってまんま同棲じゃないか。

それはちょっと、いやかなりヤバい気がする。

「こんなところ見たら何て言えばいいのかってことになるのよ」

「そ、そつやな」

「ところで、あんた学校はどうすんの？今年分ならまだしも来年は払ってもらえないじゃない」

「……出る際に親父に『お前は退学だ！』と言われたわ」

「はあ？」

「ははは……」

「はははじゃないわよ！……はあ、仕方ないわね。とりあえず今晚は泊りなさい」

「すまんな」

「今後のことはこれから相談ね」

「この部屋は誰も使ってないから」

「おつ」

「じゃあ、荷物は置いてリビングに行くわよ」

「え？何かするんか？」

「あんたのこれからについて会議すんのよ！」

「は、はい」

何もそんなに怒らなくたっていいのに……。やっぱこいつの家に来たのはまずかったなあ。まず裕樹に尋ねるべきだったかも。

「ジュースでも入れてくるから適当に座ってなさい」

「へーい」

言われたとおりに適当なソファに座って紫苑を待つ。それにしてもなんだか落ち着かないなあ。

どうしてどこことなく良い匂いがしてくるんだろうか。何というかこう、甘い香りというか。

「アップルジュースで良かった？」

「おわあ！？」

「そんなに驚かなくてもいいじゃないの」

「お、おう。アップルジュースでええけど。しかし、普通こうゆうのって淹れる前に言うもんちゃうか？」

「客の分際でごちゃごちゃ言わない！」

「し、失礼しました」

さっそく一口。

ゴクツと喉を通るアップルジュースはなんとも爽やかだった。

「ふう、なかなか美味しいな」

「でしょ？このメーカーのがお気に入りなのよ」

「メーカーで変わるもんなんか？」

「そんなこと言ってちゃ料理人になれないぞー」

「てか、俺が料理人目指すんは決定事項？」

「うん。そして一生あたしにご飯を作る」

それが目的かい。

でも、よくよく考えたら今の言葉ってなんだかプロポーズみたいだ

な。

そんな気は無いのだろうが、なんとなく嬉しい気持ちになる。だから俺は紫苑に聞こえないぐらいの小さな声でささやいた。

「ええよ」

「ん？何か言った？」

「いや、何も言つてへんけど？」

「そう？ならいいけど」

いつか堂々と返事できる日が来たら、もう一度言つてやるよ。今度はちゃんと聞こえるように……。

「では今から、大原一也これからどうすんのよ会議を始めます」

「……………」

「何よそのシラけた目は？」

「いえ、どうぞどうぞ続けてください」

実にセンスのない会議名だった。

「で、ぶつちゃけこれからどうすんの？」

「わからん」

「さっそく行き詰まったわね」

「そやな」

「……………」

「……………」

しばしの沈黙。

「「はあ……………」」

ため息もつきたくなるわな。

しかし、ホントにこれからどうすればいいのか。

まさかこのままニート？

社会の底辺に行かなあかんのか……………。

「あ、そうだ。とりあえずバイトでも探したらどう？上手くいけば
住み込みで働けるし」

「おお、なるほど」

「まあ、住み込みが見つからない時はバイト代のいくらかを納めてもらって家に居させてあげる」

「お姉さんはええんか？」

「仕方ないでしょ。それともあたしを置いて出て行くの？」

「いや、意味わからんから」

「ただし、これから食事を作ってもらうのでよろしくね」

「まあ、それぐらいなら」

「うーん！これからご飯が楽しみ♪」

「そう言えばお前、今まで飯どうしとった？」

「まあ、料理部で焼きそばの練習とかしてたから」

「焼きそばだけ!？」

なんて寂しい食事だ、それは。

「焼きうどんってのもあるわよ。野菜炒めもできるし。あとサラダは売ってるし」

「さようか……」

「まあ、いいじゃん。これからは専属コックが作ってくれるからねえ」

「そっぴゃ、もう飯は食ったんか？」

部屋にある時計は6時を指していた。

もう、夕飯を食べていても別におかしくはない時間である。

「あたしはいつも7時過ぎに食べるから、まだ」

「よっしゃ、じゃあ俺が作つたろ」

「頑張つてねー」

「まかしとき」

こういうのも悪くないかもしれない。

過去

「うん！やっぱりあんたの料理は美味しいわ」

「そりゃどうも」

「そーだね、特にこの肉じゃが！あんた良い主夫になれるわよ」

「お前は駄目な主婦になりそうやな」

ポテチ片手に昼ドラを寝そべって見る光景とかが浮かび上がってきた。

これは俺の偏見だろうか？

「あたしは働くからいいのよ！その方が性分にあってるの」

「はいはい」

「んー、ホントに美味しいなあ。なんと云つか……おふくろの味？」

「俺は男やけどな」

「じゃあ親父の味！」

「アホか……」

親父の味ってどんな味だよ？

「それにしても悔しいなあ」

「は？何が？」

「なんか飼い犬に餌付けされている気分なのよねえ」

なるほど。あまりにも的を得た説明だ。

「犬のほうがお利口ってか……」

「言っとくけど、飼い主の手を噛むようなマネしたら追い出すからね」

「わかつとるけど、人間扱いせえ」

「さっき自分で犬っていったじゃん。でも、あたし犬って結構好きだよ。個人的にはコーギーが一番！」

「要は俺が短足やと言いたいんやな？」

「ホントに好きなのよ！あの短い足でトコトコ歩く姿がラブリーよねえ」

ほわわ〜んとした顔になっていた。

こいつ、そんなに動物好きだったっけか？

まだまだ知らない一面もあるもんだな。

「そっぴゃあんだ、ちゃんと日用品とか持ってきた？」

「日用品？」

「歯磨きとかどうすんのよ？歯ブラシちゃんと持ってきたの？」

「あー、持ってきたような持ってこなかったような？」

「言っとくけどあたしのは貸さないからね」

「俺は変態か！？そんなことせんわ！」

「どうだかねえ。カズっちって変態（M気質）だと思うよ？」

「そっぴゃあ前の方が変態（S気質）みたいやけどな」

「ふっふっふっふ」

お互い睨みあっていた。

我ながら、何やってんだかな。

「ちゃんと確かめてなかったらコンビニでも行ってよね。あたし今

から風呂に入るから」

「は？」

「何マヌケな顔してんのよ。風呂なら誰でも入るでしょ。……覗くなよ？」

「わあつとるわ！」

「あ、それと鍵はテーブルの上に置いとくから、行くなら鍵は閉めてよね」

「ほいほい」

「じゃあ、入ってくる」

そうだった。今さらだがこいつは女なんだよ。

改めて意識しだすと、妙にそわそわした気分になる。なんかドキドキしてきた。

そうだ！いつも普通にしてきたようにすればいいんだよ！あれ？いつもどうやって接してきたっけ？

ヤバい。分からないぞ。

「とりあえず深呼吸だ深呼吸」

口と鼻から大量の空気を吸う。
すると甘い香りがした。

「あかん、逆効果やった……」

「何が逆効果なのよ？」

「うわああ！！きゅ、急に話しかけるんじゃないっ！」

「え？」

「驚いただろうが！少しは気を使え！」

「おーい。関西弁がなくなってるよ？」

「お、おう。まあ、それでやな……」

「ふーん。動揺すると標準語に戻るってことは、やっぱりその関西弁、意図的に話してるんだよねえ？」

「……………ああ」

「前にも1度訊いたよね？どうしてそんな喋り方してるのよ？」

「……………」

「いや、やっぱり言わなくていいよ。初めて訊いた時みたいに悲しい目してるから……」

紫苑は踵をかえして台所に行こうとした。

こいつには話した方がいいのだろうか。

少し迷ったが、俺は紫苑の腕をそつと掴んだ。

「え？」

「少し湿っぽくなるが聞いてほしい」

「……うん。わかった」

「そうだな……まず何から話そうか」

「ゆっくりでいいよ。ちゃんと聞いてるから」

「ああ」

俺は紫苑に話す決意をした。

「大阪に行ってたときに、俺の伯父の家で生活してたんだ。

2人暮らしだったし、俺がいた家と同じぐらい広かったから部屋も余ってたしな。

そのころ俺からもう既に親は忙しくて……。

それで、向こうに居た時は叔父さんと叔母さんに遊んでもらってた

んだ。

今まで俺の親は、親らしいことを全くしてくれなくてな。

嬉しかったよ。初めて家族ができたみたいで。

俺と兄貴を遊園地とか水族館とかにも連れてってくれたりしてさ。まあ、わかるとは思うけどその夫婦は関西弁を話す人なんだ。」

「ふうん。それでその人たちの影響を受けて関西弁喋ってた？」

「ちよつと違うかな。実はこっちに引越してきたのは亡くなったからなんだよ」

「え？亡くなった？」

「ああ、交通事故で2人ともな。だから俺は思ったんだ。絶対に忘れちゃいけないんだって。

絶対に覚えてなくちゃいけないんだって。

でも、写真とかの遺品は親父たちが処分してしまった。だから俺は関西弁を話してたんだ。

どんなに頑張っても言葉だけは奪えないからな」

「そつか……。そう、だったんだ」

「わかってるさ。こんなの、意味のないことぐらい」

「……………」

「でも、俺にとってはあの2人は大切な両親なんだよ」

「うん。誰も笑わないよ……」

「そう、だな」

「でもね、カズっち。きっと忘れないよ。だってその人たちはカズっちにとつての家族なんですよ？ それならカズっちの心からは消えないよ」

「あ……」

そうだ。忘れるわけじゃないか。
あの人たちは俺の家族なんだから。

俺の心からいなくなるわけじゃないか……。

「紫苑。ありがとう……」

「うん」

俺は彼女を抱き寄せた。

こいつも俺の大切な……。

俺の心の中から消えない人。

もしかしたら、あの2人はお前に逢わせてくれたのかもな。

「ところでさ、カズっち」

「ん？」

「素の言葉で喋るほど何で動揺してたのかなあ？」

「え？いや、それはだな……」

「ふふ、一緒に風呂入る？ふうつ」

「なあ！？」

耳に息を吹きかけられた。

「あれえ？顔が真っ赤だよ？熱でもあるのかなあ？」

「お前のせいだろっ！！」

「くっくっく。やっぱあたしはこうでなくちゃねえ」

どうやら「いつの性格はずっとこのままらしい」。

過去（後書き）

初めての短編小説『当たり前、でも大切なもの』を書いてみました。
よろしければ読んでいただき評価、感想をお願いします。

食事はファミレスで

「はい、はい。あつ、そうですか……。わかりました」

はあつ、とため息をつきながらケータイを切った。

紫苑に言われたとおりにバイトを探しているのだが、全然だめだ。ちなみにさっきの電話で4件目である。

バイトなんてずっと決まると思ってたのになあ。

家に泊めてもらっている紫苑には迷惑をかけたくないから、早いところ稼がないといけないのに。

俺って駄目な男だな。

「たっただいまー、って何あんた沈んでんのよ？」

「いや、何でも……」

「今、里佳たちが来てるよ。あんたと話がしたいってさ」

「えっ!?!」

ドアの向こうから2人が姿を現した。

「おい、一也!どういことなんだ!?!」

「そうですよ。今朝紫苑さんから退学って聞いて。先生からも……」

「え、あ、それはやなあ……」

「委員長のお前が抜けて、代わりに俺が選ばれたんだぞ！」

「はあ？委員長やて？」

「ゆ、裕樹さん……」

「一也の友達ってことで選ばれたんだってさ。意味不明よねえ」

「ははは」

「はははじゃないだろ！？」

「そんなこと、今はどうでもいいじゃないですか！！」

「は、はい」

「裕樹、情けないのうお前」

「で、一也さん。どういことなんですか？」

「どうもこつも親父と言い争ってキレて家出てきただけやがな」

「俺の家に来れば良かったのに……。男同士のが楽じゃないのか？」

「あー、それもそうか。結構焦ってて紫苑しか思い浮かばんだわ」

「「「……………」」」

俺を見て固まる3人。

え？何この空気？俺、なんかマズイこと言った？

「バカ……」

「なるほど。俺たちは最初から眼中にないと」

「良かったですね、紫苑さん」

「知らないわよ！」

「でも、少しくらいは思い出してくれてもいいのに……」

「もう、いいじゃないですか。裕樹さんはとりあえず黙っててください」

「はい、黙ってます」

「弱いなあ。裕樹君は将来尻に敷かれるタイプね」

俺もお前の尻に敷かれそうやけどな。

というか、何だって最近の女性はこんなにも強いんだろうか？
男尊女卑に賛成してはいないが、あの時代は一体何処へ？

「それでこれからどうするんですか？」

「とりあえずバイトでも探そう思って店に電話してたんだけど、今は募集してないばかりだな」

「あ、だから沈んでたんだ？で、何の店に電話したの？」

「サークル」サンキュー、マイクロストップ、コブンオヤブン、ロ
ーソン」

「コンビニばかりじゃないの」

「バイト言ったらコンビニやろ」

「どんな偏見よ……」

「なあ、里佳さん。俺たちそろそろ帰ろうか？」

「え？でも……」

「事情も聞いたし、これ以上俺たちがいたら邪魔じゃない？」

「うーん。まあ、そうですね」

「もう帰っちゃうの？じゃあまた明日学校でね」

「うん。それと一也、（理性保つように）頑張れよ？」

「ああ」

今の頑張れよにはきつと深い意味があるのだろう。
男同士しか分からない意味が。

「2人ともさようなら」

「うん。また明日ね」

「さいなら」

挨拶を済ませて2人は帰っていった。
その後姿が次第に遠くなってゆく。

紫苑はそれを確認して俺に口を開いた。

「で？何でまだ関西弁なのよ？」

「まだ、あいつらには話さなくていいだろ」

「何で？どうせいつかはバレるんだし……」

「2人だけの秘密ってことで」

「答えになってないじゃん。まあ、それもいいかもね」

答え……か。

別に深い意味は無いさ。

今は、このことを知っているのはお前だけでいい。
なんとなく……そう思っただけ。

「あ……」

「どうかした？」

「飯の支度してなかったのを思い出した」

「えー？何やってたのよ！？」

「バイト探し」

「あ、そっか。うーん、じゃあどこかに食べに行こう」

「食べに行くってどこに？」

「ファミレスがあるからそこにしましょっか」

「金は大丈夫なのか？」

「大丈夫よ。さあ支度して」

「了解」

「ここか？」

「うん。クールルっていうの」

「美味しいのか？」

「不味かったら来ないわよ！」

「それもそうか」

カランカラン

ドアを開けてみると、洒落た洋風の空間が広がっていた。

「いらっしやいませ。2名様ですか？」

「あ、はい」

「ではこちらの席へどうぞ」

店員さんに案内されて腰をかける。

「注文がお決まり次第そちらのボタンでお呼びください」

「はい」

「では、ごゆっくり」

店員は入口の方へと戻っていった。

「へえ。雰囲気はなかなかだな」

「そうでしょ？結構気に入ってる店なのよ」

「どうせ何日かに1回来てたんだろ？お前、料理のレパトリー少ないからな」

「カズっちは自腹ね」

「すみませんでした」

絶対にいつか仕返ししてやる……。

「アホな会話してないでさっさとメニュー決めちゃいましょ」

「そうだな……」

テーブルの端に立ててあるメニューに手を伸ばす。

開いてみるとハンバーグとかパスタとかグラタンなどのファミレス料理だった。

「あたしはハンバーグでいいや」

「俺もそれで」

「あんた、主体性がないわねえ」

「どうせどれも同じだろ……」

「結構美味しいよ？カズっちの料理に劣らずとも勝らずって感じで」

「あっそ」

俺はどうでもいいやという気分でボタンを押した。

注文して10分くらいした頃に俺たちのハンバーグが運ばれてきた。

「注文は以上ですか？」

「はい」

さて、どんなもんかね……。

ナイフとフォークを手にとってハンバーグを切ってみた。
するとハンバーグから肉汁が溢れてきた。

「ほう」

では、さっそく一口。

パクッ……もぐもぐもぐ。ゴックン。

「う、美味い」

「ほらね。だから言ったじゃない」

「ふん、これぐらいの料理なら俺にだって……」

そこまで言いかけて俺はあることを思いついた。

「なあ。ここってバイト募集してるのか？」

「うん。ってあんたまさか……」

「そのまさか」

俺と紫苑はハンバーグを平らげると店員を呼んだ。
少し待って店員がやってきた。

「注文ですか？」

「いや、ここの店長さんに会いたいんですけど。バイトの面接で」

「バイトの面接ですか？えーと、少々お待ちください」

店員は店の奥のほうへと消えていった。
マニュアルにはないことだろうから焦ってたな。

「何あの店員ばっか見てるのよ？」

「はあ？」

「ふん。どうせ可愛いウエイトレスに見惚れてたんでしょ？」

紫苑はつーんとそっぽ向いてしまった。
「ったく女ってやつは……」。

「アホ。お前だから心配すんな」

「ホント？」

「ああ」

「よし。許してあげよう」

につこりとご満悦のようである。

こいつにも結構可愛いところあるんだな。

「お待たせしました。どうぞこちらへ」

「あ、はい。じゃあ、ちょっくら行ってくるわ」

「頑張つてねー」

紫苑にも応援してもらったし、頑張らないとな。

急展開

「はあ？ヨーロッパで料理の修業をしてくる？」

「ああ」

紫苑はどういうことなのよそれ？って顔で俺を見ている。
まあ、当然そうなるわな。

「ちょっと待って……。絶対おかしい、理解できない。あんたバイトの面接に行ったんでしょ？一体何をどうしたらそんな話になるの？」

声が少々ヒステリック気味だった。
どうやらかなり困惑しているようだ。

「順を追って説明する。まず、軽く面接終わった後に色々料理を作らされたんだよ。まあ、厨房で働くのを志望したからさ」

「だからあたしを先に帰らせたの？」

「ま、時間かかりそうだったし、実際帰るのが遅くなったし」

現在の時刻は１１時過ぎだった。

面接、料理、話でいつの間にかかなりの時間が経ってしまったのだ。

「それで？」

「んで、適当に1品作ってそれを店長が食べたんだが、随分と気に入ってくれたみたいでな。

それから色々と作らされては店長が食べての繰り返しだった。

で、君の素質をこのままにしておくのは勿体ないと言われ、その話を持ち出された。」

「それで修業してこいつて？でも、あんたお金はどうすんのよ？」

「契約を結ぶんだとさ」

「け、契約？」

「ああ。なんでも店長が顔の利く人でさ、高級レストランのオーナーに俺のこと紹介してくれたんだ。

この近くに住んでるからあの店に来てもらって俺の料理を食べてもらったんだ」

「すごい展開ね……」

「で、その高級レストランで料理人として条件付きで働いてもいいと言われてな」

「その条件ってというのがその修業ってこと？」

「ああ。費用は向こうが半分出してくれて、後は働いて返すんだっ

てよ。これが契約の内容」

「……修行する期間はどれくらいなの？」

「3年間だ」

「3年か……。長いね」

「そうだな」

せつかく恋人同士になれたのに、海外に行ってしまうえば簡単には会えなくなる。

要するに遠距離恋愛になってしまうのだ。

俺も紫苑もそれを分かっている。

分かっているだけに、今この雰囲気は少し重かった。

「まあ、まだ決めたわけじゃないんだ」

「どういうこと？」

「何しろ急な話だったから5日以内に答えを出せばいいってさ」

「……………」

「だからその間、じっくり話し合おうぜ？」

「……………行つてきなよ」

「え？」

「あたしのせいでカズっちの可能性を潰したくない」

「でも……」

「それに出世するチャンスじゃない？偉くなって帰ってこい！」

「紫苑……」

「あたしは平気だよ……うん。きっと平気だからさあ……」

紫苑は俺に寄りかかってきた。
肩が震えている。泣いているのか？

そんな様子を見て辛いと思う反面、泣いてくれたことが嬉しかった。
ちゃんと俺のことを想ってくれているのだと。

「……あの店に連れて行かなければ良かったかなあ」

「……」

「そしたらこんな板挟みにならずに済んだのに」

「まだ4日あるんだ。焦らなくてもいいだろ？」

「……うん」

それから早くも2日が過ぎてしまった。

一緒に家にいるのになんだか距離が離れているような感じ。

一昨日から色々考えた。

遠距離恋愛にするか、修業を諦めるか、それとも紫苑と別れるか。
もしかしたら別れる方があいつにとっても俺にとっても良いのかもしれない。

もし俺が別れを告げたら、あいつは一体どんな顔をするだろう？
きっとあいつは泣くのかも知れない。

でも、3年間も離れ離れになるほうがあいつにとって酷だろうか。

それに俺も自信が無い。

かといってこんな良い話を逃したら、2度と機会がないかもしれない。
い。

俺は一体どうすればいい？

「やっぱり年長者に訊いてみるか……」

極力相談したくはなかった。
でも、この1件は間違いなく俺の人生を左右するだろう。
だったら仕方がない。

俺はケータイを手に取った。

「……………もしもし。一也か？」

「ああ」

「着信拒否にしてたくせに、そっちから掛けてくるってことは相当困ってるね？」

「困ってるというかなんというかな」

「まあいい。話を聞かせてもらおうか……………」

……………

……………

……………

…

「なるほど。恋人と料理とで葛藤か」

「兄貴はどうすればいいと思う？」

「さあ？」

「さあつ、て……。アドバイスが欲しいんだけど」

「お前が納得するほうを選べばいい。なんにせよ後悔しないようにな」

「でも、どれも捨てがたいんだよ」

「甘えるな。幸せを掴むには何かを犠牲にしなければいけないんだ」

「兄貴はいつもそうやって強気で話せばいいのに」

「余計なお世話だよ……」

「とにかくサンキョ」

「関西弁は使わないのかい？ずっと普通に喋ってたけど」

「家を出た手前、話をするからには自分を偽ってはいけないと思っ
てな」

「なんだ……。もう答えは出ているじゃないか」

「は？」

「自分を偽るな、ということだ。じゃあねー也、これから会議なん
だ」

「え？おい！」

プツツ……ツー、ツー、ツー。

電話切りやがった。

もう一度、発信履歴から掛けてみたが今度は向こうが着信拒否をしていた。

これが最後ってことか。

さよなら、兄貴。

後は自分で考えるよ。

急展開（後書き）

短編第2弾『夏色の海』もとうぞ。

決断の時

2人で朝食を食べている時、紫苑からある提案があった。

「思い出作り？」

「うん、思い出作り。2人で遊園地に行きたいなーって」

「……それがお前の答えか？」

「そう、これがあたしの答え」

つまり修業に行ってきたいいよということ。
それが紫苑の答え。

「遊園地か……わかった。明日は学校休むのか？」

「馬鹿。あんたはそんなこと気にしなくてもいいの！」

「そうだな。失言だった」

「あんたはもっと空気の読める男になりなさい」

そこまで言うなら、なってやろっじゃないか。

「……なあ紫苑。少し目をつぶってくれ」

「え？」

「少しの間でいいから」

真顔で言つと紫苑は顔を少し赤らめた。

「う、うん」

紫苑はそつと目をつぶる。

改めて顔を見るとこいつは美人だ。

ホントはこのままキスしたいところだが……。

むにゅ

軽くほっぺをつねってやった。

「……………」

「……………」

「……ぷっ」

「あ、あんだねえっ!!」

「あははははは!」

「信じられない! 普通あそこであんなことする!？」

「だあははははは!」

「むっかあ——!」

やっぱり辛気くさいのは似合わない。

紫苑は元気であるのが一番いい。

電車に揺られて30分。

紫苑の望みどおり遊園地にやってきた。

デートや家族で来たりするには持ってこいの人気スポットの1つ。
しかもこの遊園地は日本でもかなり大きな部類に入るので何度来ても楽しめる。

「平日だけあってやっぱり客は少ないな」

「その分いっぱい回れるからいいじゃない」

「それもそうだな」

「ねえ、知ってた？実は、あたしたちが恋人になってから初めてのデートなのよ」

「……そういえば」

友達だった頃はよくどこかに遊びに行った。

まあ、千堂がいたし、途中からは裕樹も混ざっていたが。

これは紛れもなくデートだ。

そう思うとなんだか恥ずかしさというか、むず痒さというか……。

「えいつ」

「なあ！？」

「恋人だし、いいよね？」

「……………ああ」

紫苑は自分の腕と俺の腕を絡めてきた。

次いで俺を襲うのは女の子独特の匂いと柔らかさ。

こいつとここまで密着したのはコンビニでの1件以来かもしれない。
あの時は体がボロボロだったためか、そんなに気にならないで済んだ。

しかし今は……。

「さあ、カズっち。行こっか」

「お、おおう」

ヤバい。心臓がドキドキしてやがる。

そんな俺の心中を知ってか知らずか、紫苑は絶叫系のアトラクションの方へ歩を進める。

俺がリードしてやりたいけど、今日はこいつの思う存分のことをさせてやりたい。

紫苑の歩く方へと大人しく引っ張られていた。

『ウルトラぐねぐねマウンテン』

なんてネーミングセンスの無いジェットコースターだ、これは。
もっとブラックサイクロンとかスチールドラグーンのようなカッコ

何でもかんでも『ウルトラ』を付けばいいってもんじゃないぞ。

「うわああ~~~~!!!!何だこのぐねぐねえ~~~~!!!!」

.....

.....

-
-
-
-
-
-

-
-
-

「ん？別にあれぐらい普通でしょ。もしかして酔った？」

「それは酔ってるんじゃないの？」

「じゃあ次はあれにしましょうか」

151

『ホラホラホラー』

アトラクション名が意味不明にも程があつた。

ここの開発部の連中の頭は大丈夫か？

これでは子どもに人気の某アニメにでてくるガイコツ男ではないか。

何でこんな遊園地が街の名物なんだろう？

珍味みたいなノリか？

まあ実際に入ってみた……。

「あっはっはっはっは！」

「……お前笑いすぎ」

「だ、だつてさ……。っぶ、あっはははは！」

一体なにがそんなに可笑しいのか。

紫苑はおばけを見るなり大爆笑していた。

子泣き爺の従業員、さぞショックを受けたことだろう。
てか、紫苑。お前のほうがなんだか怖えよ。

それから俺たちは色々回った。

空高く上昇する絶叫系のやつやらコーヒークップやら。

「あーねえ、あの店で土産買おうよ」

「おう」

ちょっと洒落た良い感じの店だ。

中にはお菓子やら特製マスコットグッズやらがある。

「ねえ。このぬいぐるみとこのぬいぐるみ、どっちが可愛い？」

「どっちも同じじゃねえか」

この2つの違いがどこにあるのかさっぱり分からなかった。

「微妙に違う！どっちが可愛い？」

ずいっと顔を近づけてきた。

その楽しそうな顔を見て……。

「……お前が一番可愛い」

そっぽ向きながら何となくガラでもないことを言ってみた。
視線だけ紫苑に移すとポカーンとした表情をしていた。

でも、ちよつとだけ優しい顔になって……

「……バカ」

ちゅっ

俺たちは口づけをした。

顔の温度が40度ぐらいに上昇した気がする。

……でも、こういうのもいいかもしれない。

「ねえ」

「うん？」

「最後にさ、観覧車行こうよ」

「……ああ。そうだな」

紫苑が口にした『最後』という言葉で一気に現実に戻された気がした。
もうすぐ俺と紫苑は……。

「すごい。きれいな夜景」

「ホントにきれいだな」

約束どおりに俺たちは最後に観覧車に乗っている。
まだ乗って間もないからそんなには上昇してない。

それでも遊園地のネオンは観覧車からはきれいに見えた。
同時にほんのり薄暗い中、紫苑の横顔もきれいだった。

「だんだん高くなっていくなあ」

「そうね」

月並みな言葉しか出てこない。
こんな時はなんて言えばいいのだろうか。

「ねえ。カズっち」

「うん？」

あれこれ考えていると紫苑が先に口を開いた。

「とても楽しかった。今日1日、とても幸せだったよ」

「良い思い出になった？」

「うん。良すぎて逆に寂しいくらい」

どういう意味なのかよくわからなかった。

だが、紫苑の次の言葉で嫌でも理解してしまう。

「3年後なんだよね？その間ずっと……ずっと遠くに」

紫苑は泣いていた。

暗くてよく見えないけど、声で分かる。

「ごめんカズっち。泣いちゃ、ダメなのに……涙が……うう、ぐす」

「紫苑……」

俺は紫苑を自分の胸に抱き寄せた。

いつも気丈で元気なこいつが、こんなにも震えて泣いている。

俺のために泣いているんだ……。

「……行かないで」

「え？」

「こんなに……こんなに好きなのに」

「……」

「何で行っちゃうのよ？」

「……」

「ずっと一緒にいたいよ」

それが目の前の人の願いだった。

それが紫苑の純粋な想いだった。

だから俺は……

「バカ。行くわけないだろ」

自分の本当の願いを。

「行きたくないに決まってるだろ」

偽りの無い想いを。

「俺もお前とずっとお前と一緒にいたいんだ」

飾りのない思いを大切な人に伝えた。

ささやかな想い

「ねえ、カズっち。ホントに良かったの？」

「何が？」

「修業の話」

「何回同じこと言わせるんだよ？お前と一緒にいたいんだ、俺は」

「もう1回言って？」

「もう言わない」

「何だよ？いいじゃない言ってくれたって」

「……………」

ホントは何回でも言ってやりたいが恥ずかしくなってきた。

俺は修業の話を断ってクルールのコックになった。

当然ながら断るとき高級レストランのオーナーはどうして？と訊いてきた。

俺は、恋人と過ごしている時が一番幸せだからと答えた。

この選択したことに後悔はしていない。

「ねえ。もう1回遊園地に行かない？」

「一昨日に行っただけだよ」

「今度は純粹に楽しみたいのよ」

「金が無いんですけど」

「愛があればなんとかなるわよ」

「愛があってもなんとかならないだよ」

「仕方ないわね。じゃあ初任給がでたら連れてってね？」

「そんなにあの遊園地が好きなのか？」

「うん。だってあそこに行ってなかったら、もしかしたら……」

紫苑は急に切ない顔をした。

俺はそっと抱き寄せた。

「俺はずっとお前の傍にいるよ」

「うん。ちゃんとカズっちの温もりを感じてる」

「俺も紫苑の温もりを感じてる。あと柔らかさも」

「エッチ」

「お前だけにならそれもいいかもな」

「時々恥ずかしいこと言うよね、カズっちは」

「本音なんだから仕方ないだろ」

「……バカ」

この声、この温もりがあるだけで幸せだ。
これが後悔していない理由。

夢を追うのも、富を得るのも、勝負に勝つのも良いかもしれない。
でも、それが幸せでないならきつと虚しいだけだろう。

だからきつと間違っていない。

俺は今、こんなにも満たされている。

「……お前を選んで良かった」

「ん？何か言った？」

「いや、別に」

「絶対に何か言った！」

「何も言っただけでねえってば！」

紫苑、俺はお前をずっと愛していくよ。
それが俺の幸せだから。

ささやかな想い（後書き）

最後まで読んでくれた方、本当にありがとうございました！今後のためにも感想、評価をよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9517g/>

ささやかな想い

2010年10月12日07時33分発行